kurashi@mainichi.co.jp

「偏見なくす」多くの試み

境界を生きる

LGBT先進国・カナダ

—上—

同性愛や性同一性障害などの性的マイノリティー（LGBT）を取り巻く環境は、時代や国によって大きく異なる。多文化・多民族国家のカナダは05年、同性間の結婚が合法化された「先進国」の一つだ。特に性的マイノリティーに友好的とされるトロントで、若者や子どもたちに対する支援の現状を取材した。【丹野恒一、写真も】

五大湖のオンタリオ湖岸にあるカナダの最大都市、トロント。性的マイノリティーの多様性と共感をアピールするイベント「プライド・トロント」最終日の7月1日、メーンストリートでは10日間のイベントを締めくくる恒例のパレードが行われていた。

参加者は3万人に上り、沿道は国内外から集まった120万人の観衆で埋め尽くされた。思い思いの格好で歩く当事者たちに加え、警察や銀行など「お堅い」イメージの組織も「あなたたちの生き方を支持する」などと書かれたプラカードを掲げて歩く。ひときわ目を引いたのが、トロント地区教育委員会。巨大なトレーラーの荷台に教員や生徒らがぎっしりと乗り込み、沿道から歓声を浴びていた。

トロントには、LGBTの生徒だけを受け入れる国内唯一の公立高校がある。85年の開校で、定員は40人。授業には教会の地下を使う。州外の出身者も受け入れており、寄宿費や通学費などの不足分は教会が支援する。

「親に見放され、地元の学校でもいじめ抜かれた子どもたちが集まってくる」と、数学担当のグランディさん（41）。精神的なダメージを受け、入学してもすぐに勉強を始められない子もいる。「心を開くまでに何カ月もかかることがある。3人の専任教員が、カウンセラーやソーシャルワーカーの役も担う」

同校に配置される教員はLGBTの当事者。グランディさんもゲイだ。「私にもつらい道を歩んだ過去がある。同じ経験を持ち、一体感を持てる『モデル』の存在が大切だ」

この1年で3人の生徒が「地下鉄に飛び込みたい」などと自殺をほのめかした。16歳以下のこうした言動には警察への通報義務がある。同校は警察と協力して、自殺回避のためのプログラムを受講させた。

「希望なんて何もなかった子どもたちが、自分を見つめ直し、生きるための夢を探すことに力を貸したい」

□

当事者だけの高校も■同世代に体験語り

LGBTへの偏見や嫌悪感を「ホモフォビア」「トランスフォビア」と呼ぶ。トロントでは、LGBTの若者が同世代の生徒や教員に授業で差別体験などを語り、偏見を消してもらう取り組みが、93年から続いている。

NPOが毎年秋、16～23歳の当事者を中心に約20人のボランティアを募る。彼らは40時間かけてプロの語り部のトレーニングを受けた後、学校などに出向いて授業する。年間の授業数は160回以上という。

7年間のボランティア経験を持ち、現在は指導役を務めるユーデーセイカランさん（26）は「当事者でない教師が『いじめはいけない』なんて言っても通じない。生徒と年齢が近い当事者が体験を語ることで初めて、聴く側に変化が表れる」と話す。

授業の後、教師に見せない約束でアンケートを取ると、毎回のように「まだ誰にも言っていないけれど、ぼくもゲイです」という回答がある。その生徒が翌年ボランティアに応募してくるケースも多い。

授業で強調するのは「ゲイやトランスジェンダーだから、つらい人生を送るのではない。フォビアがあることこそが原因だ」ということ。声を出せずにいる当事者にも、加害体験がある生徒にも、こうした思いが届いてほしいと、ユーデーセイカランさんは願う。

□

パレードの2日後、市郊外の教会施設で、LGBTの家族グループの会合に参加した。「LGBTに全く偏見を持っていなかったが、息子にゲイだと告白され動揺している」と話す母親。「息子に両性愛者だと告げられたが、どうしても理解できない」と苦しむ父親——。その中に「大人の考え方が知りたい」と初参加したレズビアンの女子高生がいた。

パレードの後、思い切って両親に告白した。すると、オープンな人柄だと思っていた両親に「完全に拒絶された」という。涙を流す彼女に息子や娘を重ね合わせたのか、参加者たちは「兄弟に味方になってもらうことが大切」「その場では親も感情的になる。手紙で伝え直してみては」と親身に助言していた。

□

プライドの期間中、街には6色のレインボー旗があふれていた。LGBTの多様性を象徴する旗だ。日本なら東京・銀座にあたるという繁華街のデパートのショーウインドーにも、スターバックスの店頭にも同じ旗。通りでは、見知らぬ者同士がすれ違いざまに「ハッピー・プライド！」と声をかけ合う。

こんな温かい光景を日本で見られる日は、いつ訪れるのだろうか——。そんな思いが頭をよぎった。

＝つづく

アジア系、厳しい現実

LGBTに友好的なカナダに憧れる日本人の当事者は少なくないが、トロントにあるエイズ対策の民間団体で東・東南アジアの若者への教育プログラムを担当する日本人、キャシーさん（26）＝ペンネーム＝は「LGBTの天国だと思って安易に留学を決めるのは控えて」と語る。特にゲイの場合、コミュニティーは白人中心で構成され、鍛え上げた肉体美を競い合うところがある。「小柄で筋肉質でもないアジア人は相手にされにくく、二重のマイノリティーになって傷付くことがある」。また、トランスジェンダーへの理解は、日本と比べ相対的に低いという。

プライドパレードでLGBTへの共感と支持をアピールする教員や生徒ら＝トロントで

「責任の重さに逃げ出したくなることもあるが、やりがいはある」と話すグランディさん

LGBT

レズビアン（女性同性愛者）、ゲイ（男性同性愛者）、バイセクシュアル（両性愛者）、トランスジェンダー（心と体の性が一致しない人＝性同一性障害）の頭文字を並べた性的マイノリティーの総称。